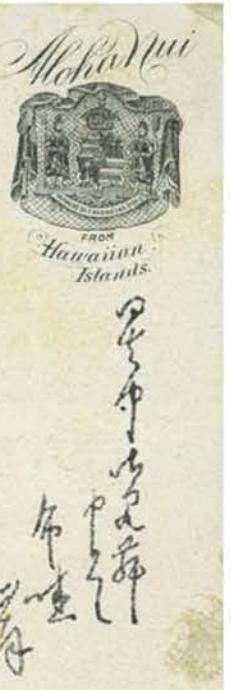


にほしま

その昔、ホノルルは水田だった

ハワイ米物語



当館蔵

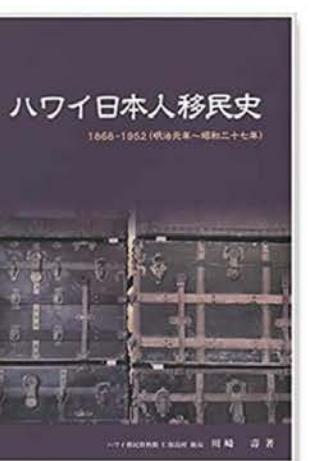
63 RICE FIELD

PUBLISHED BY THE ISLAND CURIO STORE HONOLULU

貧乏だから移民したわけではありません
あくまでも史実に基づき刻明に記述しました。
ぜひ、ご一読下さい。

発刊

語り継ぐ移民の歴史



A4判 247頁 定価 3,800円(税抜)
Amazonで注文できます

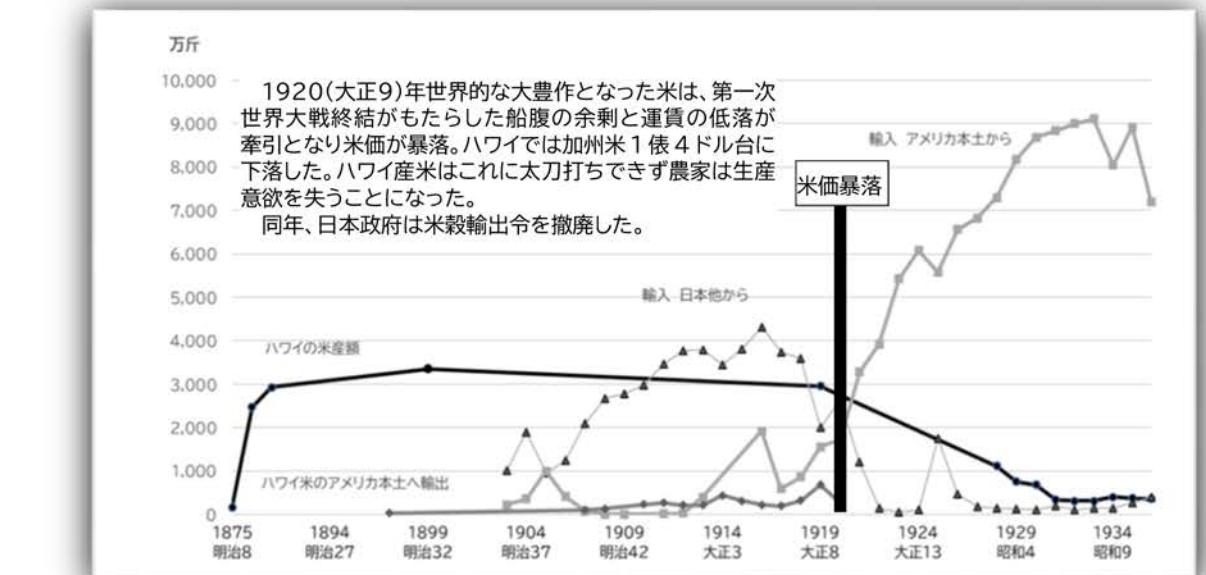
1885(明治18)年から始まったわが国とハワイ王国との移民契約。

渡航費用・住居・治療費・炊事用薪炭無料の他に、3年間人頭税を免除するという好条件であった。中でも白米は5セント以下で支給、3度の飯に白米が腹いっぱい食べられるとあって移民たちはたとえようもなく喜んだ。

やがて生活が落ち着くにつれて、支給される米がパサバサ冷めたらまずいと不満が出てきた。ならば日本の米を作ろうと水田栽培に乗り出したものの、栽培条件の良いところは全て先行移民の支那人が占め、その上組合を作つて団結。日本人が入る余地はなかった。

それでも旨い米が食べたい、その一心から残された悪条件の土地を水田に改良、時間をかけて徐々に耕作面積を増やしていく。努力は実り、ついには支那人を抜いて日本人が米作の中心に躍り出た。

ところが、将来は前途洋々と見えた米作りは、アメリカ本土カリオルニア米という手強い相手が現れて――。



精米所を作った男、木村斎次

第1回官約移民の木村斎次は、渡航中の船内で中山譲治に見出され移民監督官に抜擢。そのままハワイ島に直行、7年間駐在した。

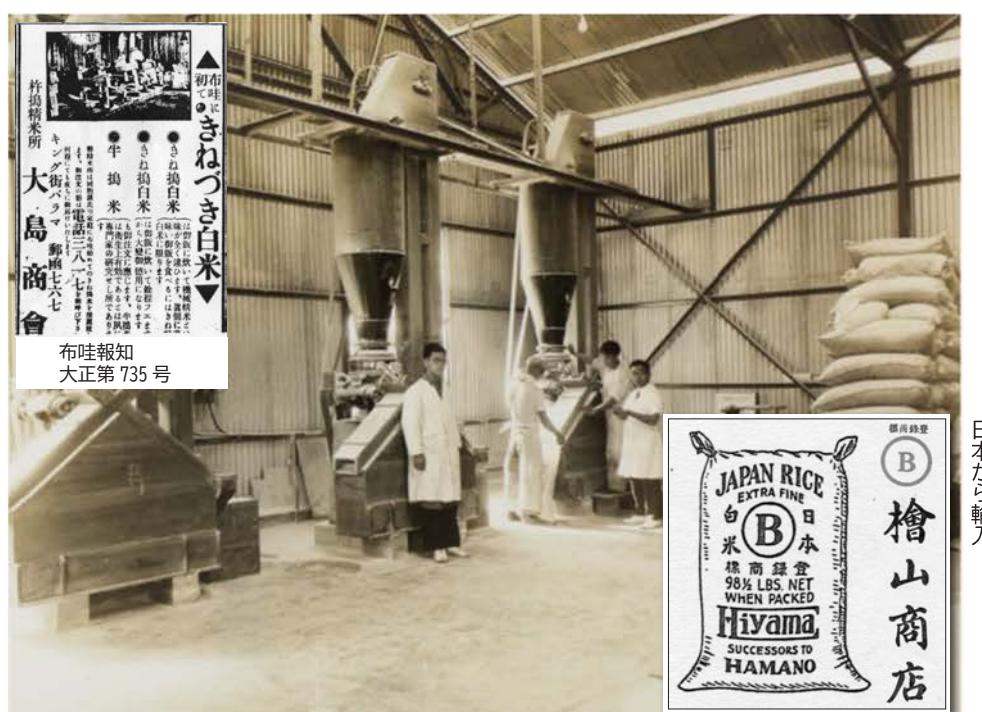
ハワイ島では、ヒロ本願寺説教所の設立、移民救済病院の開設など職務を離れて移民の福祉向上に尽力した。

1893(明治26)年職を辞し、ホノルルで日本から米・酒・食料品・雑貨類を輸入販売する木村商店を開業。なかでも米は食生活を支える必需品であったが、当時日本米は高価で贅沢品。木村は関税の不合理に着目「玄米はいわば未加工製品であり、白米と関税が同一であることは不合理」としてハワイ政府に直談判、白米より1ドル安い1俵1ドル50セントに減額させた。日本のうまい米を誰でも買える安い金額にという木村の次の目標は、自社の精米所を持つことであった。

翌年、数千ドルの資金を投入してホノルルに大規模精米工場を建設、他店が輸入する玄米の精米も引受け、白米の大量供給を可能にした。その結果、1俵8ドルの米が5ドル台に低下、人々は食費が下がり自身も大きな利潤を手にすることことができた。

1905(明治38)年、株式会社木村商会に改組、同年帰国。1913(大正2)年東京にて逝去。65歳。

在留日本人は、同氏の業績をたたえ、モイリに記念碑を建立した。長崎県大浦出身。



1934-1941(昭和9-16)年頃の ホノルルの精米所 専売特許中野式粉米機3台; 粉米能力 85俵
資料④

日本からの米の輸入は玄米であった。

その理由は、輸送中の温度差、長期間の保存にも品質を保つことができて味覚が劣らず、輸入関税も白米より1ドル安い1俵1ドル50セントであったことによる。精米所の出現は必然であった。

※支那という呼称は、当時使用されていたものです。

</

ハワイの米作り

1857年、ロイヤル・ハワイアン農会はアメリカよりもたらされた南カロライナ州産の種糸の栽培を試み、翌年、少量ながら収穫を得た。タロ芋栽培と同様の水田で育ち手間もかからないことや、栄養価も高いことが実証されるとタロ芋に次ぐハワイの第2の自給食糧として注目されたまち全島へ拡がることになった。

当初、稻作の担い手は支那人であったが、日本人移民が増加するにつれて次第に日本人がその中心を占めるようになった。同時に日本米種が加わり、支那米、ハワイ(アメリカ)米の3種類が生産された。支那米は主に米国本土に輸出され、日本米、ハワイ米がハワイで消費という住み分けになった。

米の栽培方法は水田耕法で日本と変わらず、タロ芋畑と隣どうし仲良く同居という風景が見られた。しかし、水田には水利が必要なことから栽培地域が限定され、ハワイ農林局のクラウス博士は自ら品種を改良した陸稻の栽培を推奨した。

1905(明治38)年、ハワイ島コナ・ケアラケア在留の熊本県人福永虎吉は日本から陸稻の種を輸入し、珈琲園に間作して2年間第3作まで栽培を試みたが、いずれも実入り不十分となり米の生産を断念。陸稻は顧みられなくなった。

ハワイの米作りは台風や旱魃など自然災害が少ないと、温暖な気候、良質な土壤に恵まれ、1年間に2毛作、2年間で5毛作と年間を通して栽培が可能であった。

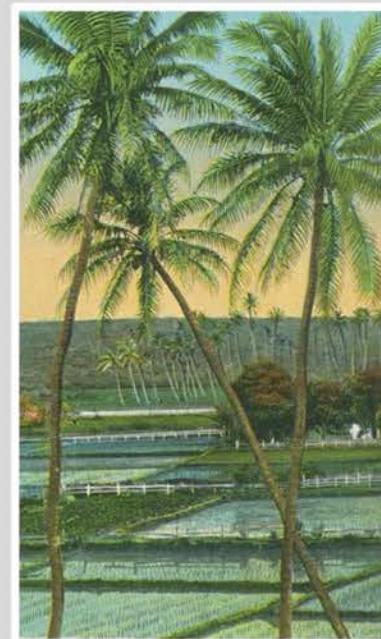
しかし、多毛作にすると収穫量が落ちること、地力の衰え、肥料も多肥となることから1920(大正9)年頃より栽培は年1回が主流となった。

稻作の天敵は鳥害であった。マレー半島よりベットとして輸入した雀に似た全身黒茶色の小鳥が繁殖。農家はこの鳥追いに鉄砲で追い払うなど自衛策に手を取り余分な出費を強いられた。

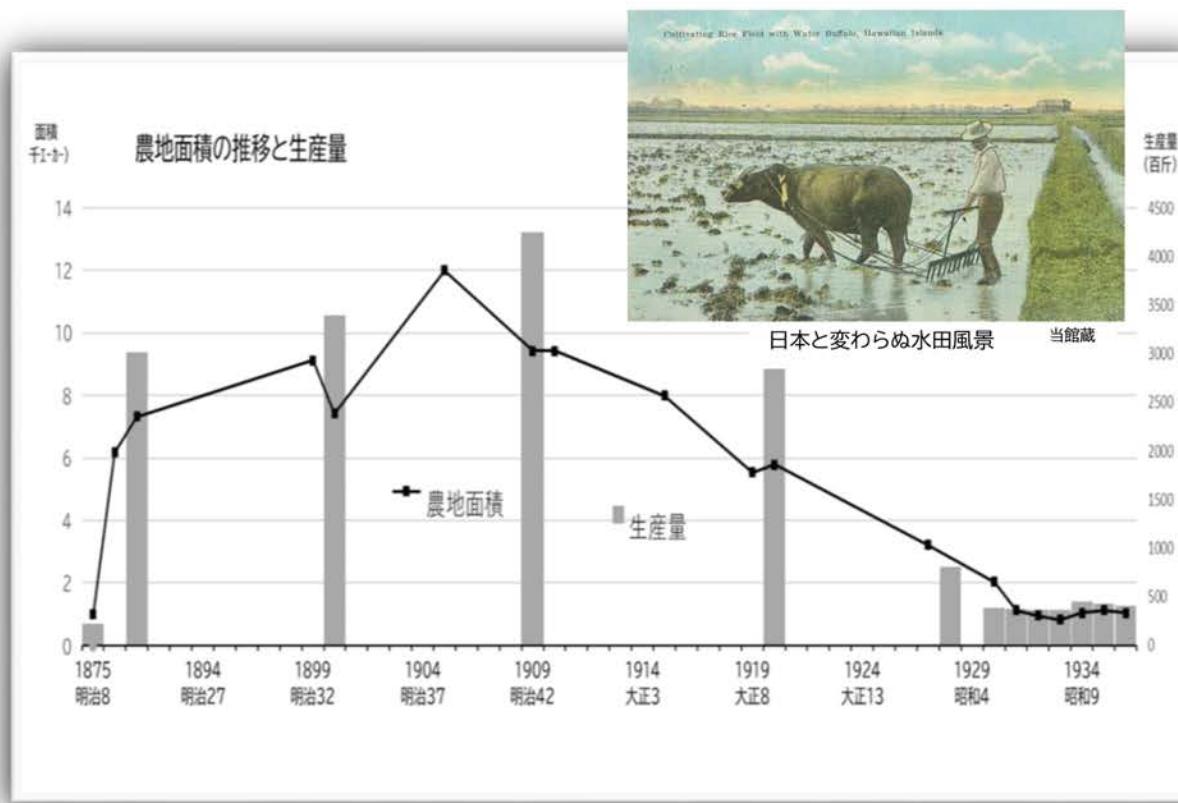
1928(昭和3)年、オアフ島で異常繁殖したこれらの鳥が支那人経営の水田500エーカーの稲穂に襲いかかり全滅。翌年耕作放棄地となつた。

この“事件”は、米農家に衝撃を与え、オアフ島の米栽培はこれを境に衰退した。

ハワイにおける米作の全盛期は1900~10年代でカウアイ島が生産の拠点となつた。1915(大正4)年以降から日本人が生産者の大半を占めた。



隣はタロイモ畑
当館蔵



統計の数値は出典により違がみられ、グラフは全体像を把握すること狙いとして作成した。

米の生産にかかる収支費

1930~31(昭和5~6)年

プラウ労働(9人役・旧1.5ドル)	13.50 ドル
田植労働 9人役	13.50
田草取 7人役	10.50
畔草刈その他 5人役	7.50
稻刈り 12人役	10.50
鳥追い 7人役	18.00
前項労働者食料費 49人役	25.00
肥料代ボーンミール 5俵	17.00
馬糞	7.00
雑費	5.00
精米・精米までの運搬費 1俵43セント	15.05
借地料・税金	30.00
合計	172ドル55セント
1俵100斤あたりの原価	4.93ドル

ハワイとアメリカ本土の米作り比較

1937(昭和12)年 日布時事布哇年鑑

	カウアイ	カリフォルニア (バッタ郡)
農地の形態	借地 ほぼ100%	借地 2/3 地主 1/3
農園の規模(エーカー)	10.30	154.00
収穫量/エーカー(袋)	23.20	35.80
労力費/エーカー(ドル)	85.57	12.22
原料費/エーカー(ドル)	18.52	11.12
総生産費/エーカー(ドル)	143.70	39.48
収入/エーカー(ドル)	131.43	53.26
比較損益/エーカー(ドル)	△12.31	13.78

米の主要産地となったカウアイ島の統計

1932-33(昭和7-8)年 日布時事布哇年鑑

西部地区ワイメア・ハナペペ・ナヴィリヴェリ	7~80エーカー
東部地区ハナレイ・コオラウ・アナホア・ワイルアヒ・カパア	
日本人	支那人
耕作面積 890	461
耕作農家戸数 92	22
	1,451エーカー

植え付けと収穫

	植え付け時期	収穫時期	育成期間
支那米	3月中旬	8月中旬	150日
日本米	6月中旬	9月中旬	120日

ISLAND OF KAUAI

カウアイ島の米所
島の東北部に集中



当館蔵

ハワイやアメリカでも米を作っています。
ハワイ(アメリカ)米は東京では2等米くらいです。
ハワイでは2年間で4~5回収穫できます。



日布時事1919(大正8)年 資料①

資料①1919.02.27 Nippu Jiji, Hoover Institution Archives,https://hojishinbun.hoover.org/en/newspapers/tnj19190227-01.1.4
資料②1903.06.18 Yamato Shinbun, Hoover Institution Archives,https://hojishinbun.hoover.org/en/newspapers/yms19030618-01.1.1
資料③1906.03.07 Yamato Shinbun, Hoover Institution Archives,https://hojishinbun.hoover.org/en/newspapers/ymz19060307-01.1.3
資料④1934-1941 Rice Mill Factory,nippujiji, Hoover Institution Archives,https://hojishinbun.hoover.org/en/newspapers/A-SH937-007.1.1



布哇日本人鑑第10回
布哇新報社